

世界の工場・中国の舞台裏を解明する

急成長を遂げる中国の産業。一見、日本を追って同じ道をたどっているように見えるが、実は日本の産業とは異なる特徴がある。中国の産業は日本とはまったく違う方向に向かい始めているのではないか。



丸川知雄

社会科学研究所 教授

<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/~marukawa/>

先 進国の今日の姿は、後進国の未来の姿である」という見方は、一般にも、また経済学者の間でも広く受け入れられている。中国の産業を調査してきた私も、中国で見られる特徴は、その後進性の現れであって、経済が発展するにつれて日本の産業の姿に似てくるのだろう、と思っていた。ところが、21世紀に入る頃から、どうも中国の産業は日本と向かっている方向が全然違うのではないかと疑い出すようになった。

典型例が携帯電話産業である。日本の携帯電話産業は自分たちが世界の先端を行っていると自負してきた。実際、テレビが見られ、位置確認ができ、電子マネーとして使える携帯電話なんて日本以外に存在しないが、日本ではそれが当たり前である。ところが、日本

の業界では最近「(日本は)ガラパゴス諸島」と自嘲的に語られているをご存知だろうか。携帯電話がこんなに特異な進化を遂げた国は他にはなく、自分は先頭だと思って後ろを振り返って見たら誰もいなかったのだ。

中国の携帯電話産業は日本の対極にある。通信会社が業界を仕切っている日本と違って、中国ではメーカーが勝手に携帯電話を作って売っている。その極みが世界に類を見ない「ヤミ携帯電話」の存在である。これは無名な中小業者が公的機関の型式認証を受けずに作っているもので、「ヤミ」といってもその市場規模は年3000万台以上に及び、一部海外にも輸出されている。

通信会社の支配が強くて特異な進化を遂げてきた日本と、自由気ままな中国。この差は経済の発展レベルや所得水準の違いで説明できるのだろうか。私にはそうは思えない。むしろ日本と中国の社会・文化の差を反映しているのではないか。

もっとも、そうした説明を行うよりも前に、まずは携帯電話産業で観察されたような特徴が他の産業でも見られるのかどうか調べるのが先決だと思っている。例えば、自動車産

業。日本では自動車メーカーが強いリーダーシップを持って、部品メーカーと緊密に連携することで自動車を開発し生産している。中国の自動車メーカーはエンジン、デザイン、試験まで外部の力に頼ることで手取り早く製品を市場に送り出す。垂直統合的な日本、企業間分業を利用した新規参入が活発な中国という差は携帯電話産業と共通しているが、携帯電話と違って、日本が世界的に孤立しているわけではないし、中国が成功しているわけでもない。

一方、太陽電池産業では日本勢が技術的にも生産量でも世界のトップを走ってきたが、ここ数年中国勢が急拡大して2007年には生産量で日本を上回った。日本企業は新技術開発を重視するが、中国勢は製造装置を外から買ってきてスピーディに生産能力を拡大する。どちらも同じ市場(欧州と日本)を相手にしているのに、企業の行動は対照的である。

同様の事例はまだまだ出てくるだろうと思っている。そして、そうした相違は先進・後進の違いなのではなく、産業の構造には多かれ少なかれその社会の文化が反映していることの証左なのではないかと考えている。



中国の携帯電話開発現場



上海・浦東地区



エンジンを日本(三菱)に、デザインをイタリアに、安全試験をイギリスに委託して開発された中国メーカーの自動車